校長メッセージ　～合言葉は「子どもに軸足！」～

東長良中学校　丹羽

目指したい子どもの意識

1．「ならぬものはならぬものです」という心を自分自身の中に植え付ける

会津藩の藩校「日新館」には、子弟の心構えとして童子訓「什の掟」というものがありました。その教えの中には、「三、虚言を言うことはなりませぬ。四、卑怯な振る舞いをしてはなりませぬ。五、弱い者をいじめてはなりませぬ。」などという現代こそ強調しなければならない教えが含まれています。そしてその最後には、「ならぬものはならぬ」という戒めがあります。これは一般には、「ダメなものはダメ」と他律的に捉えられがちですが、本来は逆です。これはあくまでも自分の心に向かっての戒めであり、極めて自律的なものであり、厳しい自律心を内に形成しようとするものです。他律であれば、単に強い者に従っているだけで、決してその心は本物にはならないのです。子どもにも、何かに甘えたり、ごまかしたりすることなく、「ならぬものはならぬ」という価値観を心の中にぜひ形成させてやりたいのです。この自律心の育成に向かうことなくして、子どもの指導をしたとは到底言えません。それには、会津藩の「ならぬものはならぬものです」の本当の意味（自分に厳しい気持ちを自分自身の心の中に植え付けていくこと）を実践・指導していくことです。社会規範を育てる教育の目指すところは、誰かに言われてやるのではなく、誰も見ていなくとも、正しいことを“自分の心の命令”でいつでもできる力をつけていくことです。

2．「やらされている」のと「それがいいと思ってやっている」のでは大違い

「挨拶がよい」、「服装や髪型がよい」、「整列がよい」、「私語がない」、「掃除を一生懸命やる」、例えばこのようなことは、どの学校も目指していることであり、ある意味ではこれらは外からみただけでもすぐにわかるので、学校や子どもの善し悪しを判断するバロメータになっています。しかし、一見同じように見えても、何か外的な力が働き「やらされている」のか、自分たちが「それがいい、そうすることが当たり前」と思ってやっているのかでは価値がまったく違います。やらされているとすれば、環境が変わればすぐに元に戻ってしまい、本人の身には付かないし、それは教育ではありません。中には「それは理屈抜きのしつけだ」という教師もいます。しかし、その論理が中学生になってからでは全く通用しないということは、ほとんどの教師が知っています。力のない教師や傍観者的な教師ほど、まだそんなことを言っています。

3．「そうしている自分が誇らしい」と思えるようになるまで

子どもの道徳的な行為や望ましい行為は、一見同じように見えても、先生にやらされている場合はとても不自然な感じがあり、先生の力が及ばなくなればすぐにやらなくなってしまいます。本当に身に付いている場合は、とても自然であり行為に品格すらあります。そうなるためには「そうすることがよいことだ」という価値観を子どもが自分の中に確立するまで、教師のあきらめない指導が必要です。そして、それができた子どもには、もう一歩進めて、「そうしている自分が好きだ」、「それが自然にできる自分が誇らしい」、「みんなができているそんな自分の学校が誇らしい」、という自信と誇りをぜひ植え付けてやりたいのです。生徒指導で教師が目指すべき崇高な目標だと思います。そこまでくると、その行為が個人の揺るぎない習慣となり、学校のよき風土や伝統になっていくのです。

4．ルールを守るだけでなく、望ましいマナーを身に付けた子どもに

「ルールからマナーへ」という目標をたてている学校がありました。ルールもマナーも集団生活を行っていく上ではどちらも大切です。ところで、ルールは守らなければならないという他律という面もありますが、マナーはきまりというよりは相手への思いやりが優先し、自律的で豊かな集団生活、社会生活へとつながります。大人になればなるほどこのような考え方で自分を律しながら生活していける子どもを育てたいものです。「おしゃれは自分のため、身だしなみは他人のため」という言葉もあります。